



平成24年11月3日(土)富士見祭開会式に校友会より、藤井重壽副会長(62回)、石黒茂雄常務理事(67回)・加賀山文雄常務理事(74回)の3名が出席した。今年のテーマは～Heat your heart～。曇り空の少し肌寒い“風のガーデン”も学生達の熱いheartで盛り上がっていた。

藤井校友会副会長より前田祐貴学生会会長(4年)へお祝金が渡された。

校友会から一首「校友の 歴史の重さ 手渡して 頼むぞ後輩 母校の未来」

そして学生さんからの返首「伝統を 守ってゆきます 我々も 富士見・浜浦 熱き心で」

KOYU Times 創刊に寄せて

近藤勝洪 会長(54回)



学生諸君、こんにちは。諸君は卒業後、どのような進路を選ばれるにせよ、母校日本歯科大学との絆を失うことはありません。

日本歯科大学校友会(会員数9,163名)は、歯科医師として全国各地で活躍している卒業生によって組織され、47都道府県で活動しております。楽しい時も苦しい時も校友会は会員を支え、母校とともにあります。

わが国最古の歴史を持ち、伝統と創造に満ちた我が母校は、歴史の荒波に揉まれても揺らぐことなく、現在も歯科医学教育・研究・診療の最先端を走っています。そして日本歯科大学校友会は、歯学会とともに母校を支え、寄り添いながら母校の限りのない発展を祈っています。

今回、創刊する“KOYU Times”は、在校生の皆さんに日本歯科大学校友会を知っていただくとともに、母校と会員を結び話題や情報を提供するものです。読んで楽しい、仲間との話題に上るような小冊子を目指して、今後、季刊として発行していきたいと考えています。

学生諸君の意見も聴きたいと思いますし、要望を寄せていただいても結構です。日本歯科大学新聞や校友会歯学会会報とは異なる新しい分野への挑戦です。校友会の取り組みや考え、また、発刊にあたっては、大学の支援もいただいたことに感謝し、挨拶いたします。

校友会・学生会 特別講義 (新潟生命歯学部)

テーマ
**ひとつながりの医療
～病院歯科の取扱説明書～**

平成24年11月30日(金)特別講義

●講師：

聖隷浜松病院

リハビリテーション科歯科

門田千里先生(90回)

外は冷たい雨のアイヴィホールに、病院実習を終えた5年生達が集まってきた。日々実習に励んでいる後輩達を前にして、浜松より遥々やってきた門田先生が熱く講演された。

病院歯科とは、口腔ケア、摂食・嚥下リハビリテーション、専門的歯科治療について歯科医師が病院で行うことを指す。術後の口腔ケアや摂食・嚥下リハビリを行う



特別講演を終えた門田先生(前列右から3人目)
校友会の役員・教務の先生と共に

ことで入院期間の短縮につながるなど、病院の中で歯科医師の行う役割はとても大きい。さらに歯科は、これから医科と関係を深め“ひとつながりになる”ことで、多くの患者さんを救うことができる。

「ひとつながりの医療は今まさに実現しつつある。医療の現場で歯科の知識と技術は驚くほど役立つ。歯科業界の未来は決して暗くはない！」



東日本大震災で 校友会が果たした役割

2011年3月11日、14時46分…。

それは未曾有の大災害、東日本大震災が発生した、忘れることのできない日時です。

— の大震災は東日本の広い範囲で、本学の校友にも大きな被害をもたらしました。校友会(本学同窓会のことです)は、早速3月17日に「校友会災害対策本部」を立ち上げます。同19日には光安一夫会長(当時・現相談役・47回)が青森、岩手、宮城、福島、茨城の各県校友会長を見舞いに訪れ、被災状況を確認しました。人的被害(死亡)2名、1/3壊以上147件、原発避難6件という想像を遙かに超えた悲惨な状況でした。

校友会は直ちに校友会義援金窓口を設置し、長期に亘る復興のためのご支援を校友会会員(在学生諸君の先輩達です)をお願いいたしました。結果として北海道から沖縄までの

47都道府県・校内校友会から3760万円もの義援金が届けられ、校友会からの見舞金を合わせ、総額4630万円もの支援を被災地の校友に送ることができました。まさに全国の校友が手を取り合い、一致団結して被災地の校友に手をさしのべたのです。

近藤勝洪現会長(54回)は「被災県各校友会からの確な情報が届けられ、マスコミでは報道されないことまで把握できました。この被災体験を風化させないように対処しなければなりません」と、また光安一夫相談役も「金銭では代えられない絆とその心を持ち続けることが大切なのです」とそれぞれ語られています。また本学としても、生命歯学部と新潟

- 1 震災により海水と泥にまみれた歯科用器具
- 2 被災地歯科保健医療支援活動
- 3 被災地の見舞いと視察に訪れた光安会長(当時)と大里青森県校友会会長(当時)
- 4 被災されたご遺体の歯科的身元確認作業
- 5 震災により大きなダメージを受けた治療ユニット

生命歯学部の選抜チームが、身元確認支援と被災地歯科保健医療支援活動に出勤しました。

在学生の諸君は、同じ学窓で学び友情を育む仲間です。しかし卒業後はそれぞれの進路を選択することにより、進み道は別々となることでしょう。

でも、決して諸君は一人ではありません。必ず校友が、そして「校友会」が、困り悩みを抱えた君達の力になれるはずです。大きな犠牲を払った東日本大震災が、図らずもそのことを力強く物語ったのだと思います。

多摩クリニックを紹介します

昨年10月、わが国初の口腔リハビリテーションに特化した歯科クリニックがオープンしました。今後、臨床実習で学ぶ多摩クリニックへ見学にやってきました！



生命歯学部5年
大徳光世

赤い壁と日本歯科大学の校章がひととき目を引く、3階建てのクリニックです。



入ってすぐに目に留まる、校友会から贈られた大きな仕掛け時計。とても可愛らしかったです。



検査、診療、訓練や指導など、スタッフ同士が連携し、リハビリテーションにあたっています。



術前検査の設備、全身麻酔器、回復室が完備されており、全身麻酔下での診療を行うことができます。



訓練室はマジックミラーになっており、患者さんに緊張感を与えずに現場を観察できます。



栄養指導室にはキッチンがあり、講義や実習で、専門家から地域の方まで幅広く「食」についての情報発信をしています。



売店「はつらつ」。介護食や介護用食器などがあります。介護食は、バリエーションも多く、地元の方も買いに来られます。

「食べる」を支える歯科医師として



歯科医師は、咀嚼機能や嚥下機能の専門家として、食べることの楽しさを支える、いわば「生活の医療」の重要な役割を担っています。地域住民が住み慣れた土地で生き生きとした質の高い生活が送れるように、医療、介護、福祉の有機的な連携に基づく地域包括ケアシステムの構築の必要性が叫ばれています。口腔リハビリテーション多摩クリニックでの臨床参加では、「食べる」を支える担い手との歯科医師、さらには、地域包括ケアの一員としての歯科医師はどうあるべきかを学ぶことになります。

口腔リハビリテーション多摩クリニック
院長 菊谷 武

見学を終えて

口腔リハビリテーションの必要性を実感

私たちにとって、食べること、話すことは日常の喜びには欠くことのできないものですが、それを当たり前に行えない患者さんがいます。口腔リハビリテーション多摩クリニックでは、そういった患者さんの生活の質を高めるための環境が整えられていて、とても興味深く見学させていただきました。

また患者さんのみではなく、介護に携わる職業の方や地域の方への情報の発信基地としての活動もしており、口腔リハビリテーションが多くの人から必要とされていることを感じました。

新潟『医の博物館』紹介



医の博物館は日本初、唯一の医学博物館で、平成元年(1989)に開館しました。歴史的な実物資料を通して医学史・歯科医学史を研究し、教育普及することを目的としています。A・ヴェサリウス『ファブリカ』、山脇東洋『蔵志』、杉田玄白ら『解体新書』等の古医書をはじめ、医療風俗を描いた浮世絵、医学・医療のバイオニアたちの自筆書簡、昔の器械器具など、医歯業に関する諸資料(史料)約5000点を展示し、一般公開しています。さらに、19世紀終わりの、油圧式で昇降するチェアや足踏みエンジンも体験できます。

新潟生命歯学部 医の博物館 学芸員
樋口輝雄(写真中央)

医の博物館へは、大学1年の医学概論の講義で見学して以来の訪問でした。1年の時より専門的な知識が増えた4年での訪問では、歯学の進歩を肌で感じることができ、歴史ある歯学を勉強していることを誇りに思いました。

新潟生命歯学部4年 水野久子(写真右)

館内では解体新書のレプリカを手にとることができたり、昔の歯科治療器具や木製義歯、江戸時代の浮世絵や世界の医師描写図などの美術品を間近に見ることができ、医歯学の知識の有無にかかわらず興味が尽きない施設だと思いました。

新潟生命歯学部4年 北野翔丸(写真左)



医の博物館は、食堂がある棟の2階にあります。ガラス張りのエントランスで、陽が差し込んで明るい雰囲気です。なんと、観光に来られる方も！



医業の神様にお祈りして…テストできるという。江戸時代の医家では神農像を祀りつつ治療を行っていたそうです。



これは貴重！
医の博物館名物！
本物の解体新書が展示してあるのです！



お歯黒などの歯科風俗・医療風俗を描いた浮世絵も数多く展示されています。さらに、ヨーロッパや漢などの古医書などの展示もあり、グローバル！



昔、実際に使用されていた義歯です。中には木床義歯なんてのも…

房楊枝という昔の歯ブラシです。仏教伝来とともに歯磨き習慣も伝来したそうなんです。痛そう…



診療室での物語

カルテ No.1 命の恩人



心療歯科 大津光寛(80回)

「あの……入れ歯がどうしても合わないんです……」

ユニットに座ったその初診の患者さんは、膝の上で硬く組んだ手だけを見つめながら、消え入るような声で答えてくれました。65歳女性と印刷された真新しいカルテを前に始めた面接にも、わずかに首をふる小さな声で言葉少なに答えるだけです。しかし、決してこちらを見てく

れないその面持ちは、どこか思い詰めているようにも見えました。

「入れ歯が合わなくて、食欲がなくて、それに舌まで痛いし、味も分からないんです。だから食事が摂れなくて……体重も減ってしまって……時間が無いんです、新しい入れ歯を作ってください」

確かに下顎の入れ歯は壊れていて、すぐに外れてしまいます。これでは入れ歯が合わないといっても不思議ではありません、でも……

「時間がありません」

その一言でひとつの病名が私の頭をかすめました。

その後の面接は春休みで騒々しいほどに活気溢れる隣の小児歯科診療室とは対照的に患者さんのトーンに合わせ、静かにゆっくりと進んでいきました。そしてポツリポツリと自分のことを話し始めてくれたと安心し始めた時。

「もう死ぬつもりなんです、だから新しい入れ歯が欲しいんです」

眼いっぱい溜まっていた涙が一筋流れ落ちました。

私の頭をかすめた病名は確信に変わりました……うつ病。

患者さんの話をゆっくりと、そして優しく聴きながら、私の頭の中では以前読んだ精神科の教科書をフルスピードで繰って行きました。どうすればいい？ なにを言えばいい？ 『患者の話にしっかりと耳を傾ける』『死なないと約束するまでは帰さない』

ようやくとり着いたページには確かにそう書いてありました。

話を十分聴いたあと、ゆっくりと静かに、うつ病という病気にかかっているらしいこと、でもうつ病は必ず治る病気だから治療をすれば必ずまた以前のように元気になることを丁寧に説明し、

「うつ病が治ったら必ず新しい入れ歯を作ります。だから今は死のうなんて考えてはいけない」と……

なんとか死なないと約束を取り付けると精神科へと紹介としました。「老年期うつ病」それがこの時の精神科診断名でした。

その後、精神科で治療を受け、

2ヶ月後、再び来院した患者さんは初診時とは見違えるほど表情も明るく、澆刺とした対応をしてくれました。面接を行ったところ満面の笑顔を見せ、

「本当にありがとうございました、体が嘘のように元気になったし、もう死にたくななんて全然ない、先生は命の恩人」とそれは嬉しそうに話してくれました。その後も盛んに体調や生活がどんなに良くなったかを楽しそうに話してくれましたが、まだ何も直っていない入れ歯については何も言ってくれません。そこで恐る恐る聞いたところ、

「入れ歯もピッタリ合って何でも美味しく食べられるんですよ！」

あの時充分な面接をせずに、ただ入れ歯を作る準備を進めていたら、その入れ歯を入れることはできなかったかもしれません。

提示症例は患者さんのプライバシー保護のため、本人と特定できる事項は削除、変更しています。また詳細についても若干の修正を加えました。